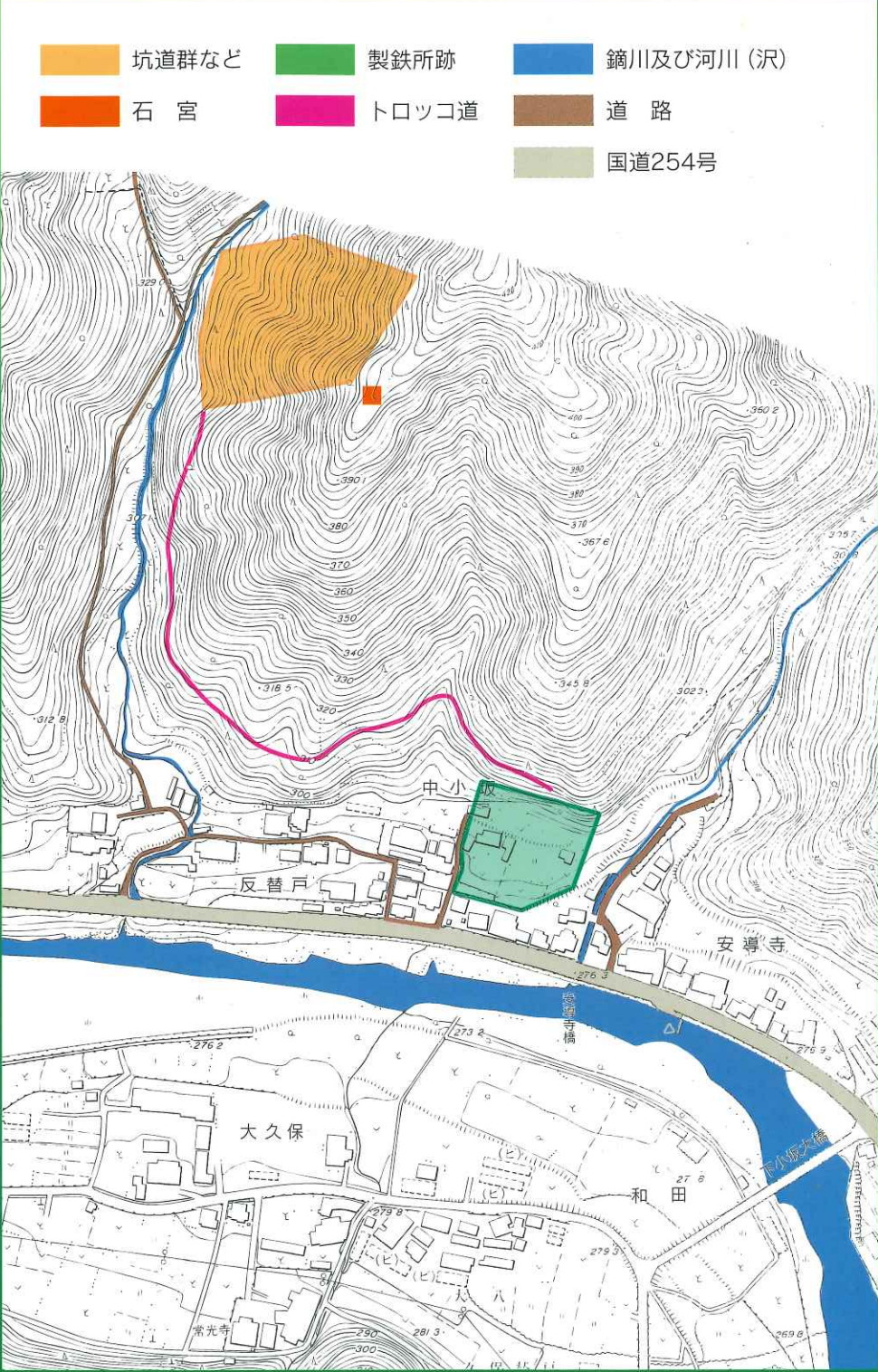


中小坂鉄山年表

西暦	日 本	中小坂鉄山では	国 内 で は	下仁田町では
1848	江戸	中小坂鉄山の採掘始まる		
1853	幕末	嘉永6年	ペリー来航	
1854		安政元年	製砲原料として中小坂鉄山の鉄使用（水戸藩）	日米・日英・日露和親条約締結
1855				
1856				
1857				
1858				
1859			安政の大獄	
1860		万延元年	桜田門外の変	
1861		文久元年		
1862				
1863			新撰組結成	
1864		元治元年		下仁田戦争起こる
1865		慶応元年	幕府より小坂鉄山の開発命令	
1866				
1867			大政奉還	
1868	明治	1		上町焼き討ち事件
1869		2	採掘権が野村誠一郎へ	廃藩置県
1870		3		イギリス公使養蚕業視察
1871		4		
1872		5	富岡製糸線業開始	下仁田村が下仁田町へ
1873		6		
1874		7	洋式製鉄所として操業開始	
1875		8		富岡警察下仁田分署できる
1876		9		
1877		10	小坂鉄製品内国勸業博覧会に出品	西南戦争
1878		11	中小坂鉄山官営へ	郡区町村編成法発布
1879		12		
1880		13		
1881		14	中小坂鉄山民営化	
1882		15		
1908		41	中小坂製鉄所操業中止	下仁田に電話が入る
1918	大正	7	中小坂鉄山諸設備撤去	第1次世界大戦終わる
1919		8		
1920		9		下仁田倉庫(株)設立
1921		10		
1922		11		
1923		12	日本鋼管(株)採掘権設定	関東大震災
1924		13		上信電鉄電化
1935	昭和	10		下仁田町役場新設（諏訪神社）
1936		11		
1937		12	園部兄弟鉄山再開	下仁田家政女学校設立
1943		18		
1944		19		
1945		20	太平洋戦争終結	
1946		21	日本国憲法発布	
1952	和	27	東京富士工業(株)へ経営権譲渡	
1953		28		
1954		29		県立妙義公園となる
1955		30		合併により下仁田町となる
1956		31		
1957		32		
1958		33	一万円札発行	
1959		34		
1960		35	カネヤス鉱産(株)深鉱作業を行う	カラーテレビ放送開始

中小坂鉄山略図



中小坂鉄山研究会

中小坂鉄山は知られ始めたばかり、まだ分からないことがいっぱい！
鉄山と製鉄所跡は不思議なことがいっぱい！
現地は魅力がいっぱい！
みんなで探検！ 調査研究してみませんか！

- 編集・発行
下仁田町中小坂鉄山研究会
〒370-2601 群馬県甘楽郡下仁田町大字下仁田385
- 代表者 園部 洋

群馬県下仁田町



第1回内国勸業博覧会に出品された大火鉢
(上原 浩氏所蔵 下仁田町歴史館展示)

中小坂鉄山 今昔



中小坂鉄山製鉄所跡遠景



明治11年宮内庁撮影「群馬県史 資料編24」

中小坂鉄山の重要性について

中小坂鉄山についての研究は大橋周治氏をはじめ多くの方が研究しています。その分析の要点は！

1 製鉄史上での3点の重要点

- ①「わが国で最初に蒸気機関による送風を持って洋式の木炭高炉を創業したことで、わが国の本格的な機械制製鉄はここからはじまる」こと
- ②「小規模ながら鉄鋼一貫作業の形態」をとり、「パドル炉の完全操業による錬鉄生産もこの製鉄所がわが国の製鉄史上、最初にしてかつ唯一の実績である」こと
- ③「鉄鋼一貫製鉄所を民間資本で建設し、一時的にも技術的にも成功をおさめている」こと

2 廃業の原因・製鉄史上での取り扱いが低いのはなぜ？

- ①もっとも早く製鉄近代化に一定の成果を収めたのに、ごく短期間で挫折、経営を放棄したのはなぜ？
- ②廃業した直接の原因は？「鉱脈の一時的断絶」？「資金難」？「輸入鉄鋼との競争」？

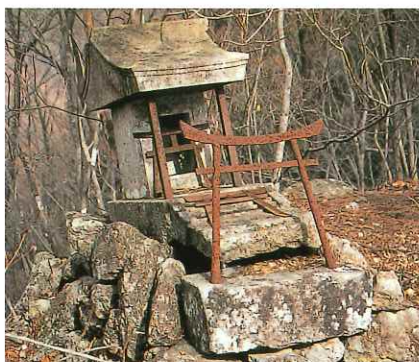
注：一倉喜好氏著「近代群馬の行政と思想」（その3）より引用

富国強兵策
と
中小坂鉄山

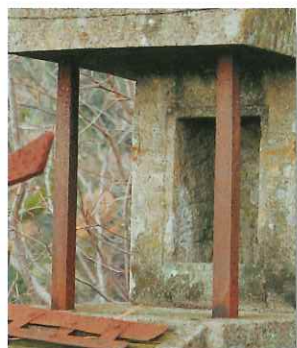
小坂鉄山での洋式高炉製鉄以前は、出雲を中心とした砂鉄から作られるタタラ製鉄で和鉄と呼ばれるものでした。和鉄は還元が不充分のため不純物が多く、大砲等の製造には不向きな鉄でした。ペリー来航以来、武器製造のため幕府も製造用の鉄の生産を考え、目を付けたのが中小坂鉄山の磁鉄鉱でした。水戸藩でも中小坂鉄山の鉄鉱石で製造にとりかかった記録も残ります。この計画には小栗上野介も参画しています。中小坂鉄山は江戸末期から採掘が始まり、明治6年洋式製鉄所としては日本で最初の操業を、民間資本で開始しました。一時は順調な生産を続けていましたが、その後、官営化され、また民間に払い下げられました。当初、順調な生産を続けていた製鉄所が大きな成功をおさめることなく、閉山をしなければならなかったかは諸説ありますが、不明な点も多く残ります。①鉱脈枯渇 ②資金不足 ③耐火レンガ不良説 ④輸入鉄増加説 ⑤その他

現地で
見られる
遺物

鉱山山頂付近にある石宮



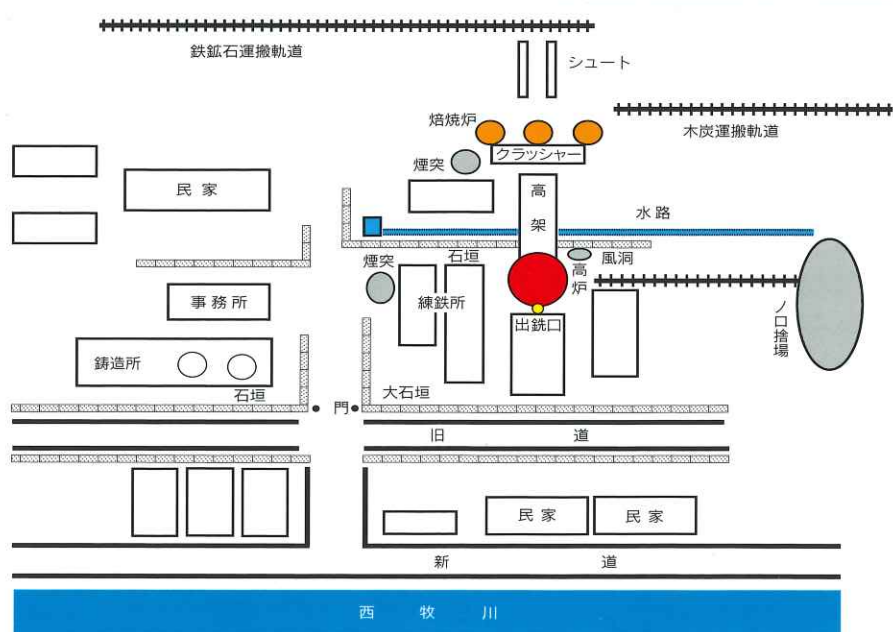
石宮の鉄柱に刻まれた文字
「明治八年乙亥三月十九日
当山ノ産品岩鉄製テ作之也」



坑道



中小坂製鉄所推定図 (石原征明氏作成)「上州路131号より」



下仁田町歴史館で見られる遺物



昭和期の鉄鉱石サンプル



中小坂で作られた鉄火鉢



中小坂鉄山看板

昭和期に使われた道具



カンテラ



セットウと石のみ



フィゴ



昭和期の小坂鉄山鉱業所のハッピ



出勤簿・経営日誌



高炉の底部に残された鉄塊

昭和期
開山当時
の写真



レンガいろいろ



英国製レンガ (SNOW BALL)



英国製レンガ (LANCHESTER)



国産レンガ (赤羽製作寮)



国産レンガ (SHINAGAWA)

製鉄所の立地

現在は、鉄鉱石・石炭・石灰石などの多くを輸入に頼っているため、多くの製鉄所は臨海工業地帯に分布しています。中小坂鉄山については、鉄鉱石の産出する場所に製鉄所を建設しました。石灰石は青倉地区から産出されるものを利用し、石炭の代わりに木炭を利用し製鉄を行ないました。木炭は石炭より硫黄やリンが少ないため、より好都合でした。なお、その当時、下仁田町は木材や木炭の産地でもありました。近隣ですべての材料が調達できる好条件にあった訳です。なお、出来あがった製鉄を運搬するため、馬の通行がやっとであった道は荷馬車が通れる道に改良されました。明治10年前後のことです。